



読者からの声

石川医報の「読者からの声」は、会員がいろいろな意見を交換する場です。
ぜひ、皆様からのご意見、ご投稿をお待ちしております。
(編集部より)

女性医師の窓

おせち

轟 千栄子

4月19日父が亡くなりました。羽咋の駅前で旅館を営み、跡継ぎだった長女の私が医学部へ行くことも夫との結婚も許してくれた父でした。私たちの開業が決まって、旅館をやめ、駅前から毎朝はやく診療所にきて母は三度の食事の支度から待合室の掃除、父は外回りの掃除や水まきから買い物、役所の手続き、冬の除雪など様々な形で私たちを助けてくれました。患者さんがたくさん来てくれる様子を見て安心し、診療所のとなりに家を建てて引っ越してきました。万が一うまくいかなかった時のためにその新築の資金はそれまでとっておいたようです。

それから足かけ30年、春には診療所の前の桜にぼんぼりを飾り、冬には暗いうちから除雪車を操り広い駐車場から近所の歩道まできれいに除雪し、疲れて帰った時には「いや～、今日は忙しかったね。ご苦労さま」と笑顔で迎えてくれた父も寝室のベッドと居間のテレビの前の椅子をシルバーカーに助けられながら往復する毎日となりました。

3年前には心不全で金沢循環器病院に緊急入院。何度か入院している父を普段は見に行くとはいわない母が毎日見舞いに同行しました。その母も病室まで歩くのがつらいといい、毎回時間外の玄関から車椅子を借りることになりましたが、狭心症でした。「おい、もう少し遅かったら危なかったぞ。」と高校の同級生である父の主治医にいわれ手術を受けました。その年の年越しはふたりそろって病院で。回復したふたりの個室を往復する毎日でしたが、お正月のおせちを病室に持ち込み3人で一緒にいただき、それなりに楽しい時間でした。

この入院以降それまでひとりで車を運転し通院していた父も母と一緒に私が連れて行くことになりました。ちょうど毎週、現副院長が外来に来てくれるようになっていました。初めのうちはシルバーカーを押してひとりで自動受付機で受付をすまし、検査へと進む父の後ろ姿を車椅子の母と追っていましたが、いつの頃からか私が受付をするようになり、先に歩き始めた父に追いつき、そして父を追い越すようになりました。今年の3月には途中で動けなくなり車椅子を借りることに。これからの通院はどうしようと内心途方に暮れました。まもなく父が入院、コロナのために面会はできず時間外受付に差し入れや着替えを渡して帰る毎日でした。随分不安で寂しい思いをさせたとおもいます。一旦退院しましたが1晩家で過ごして再入院となり、90歳の誕生日を目前に亡くなりました。ちょうど日曜日、前日は小康状態で明日は連絡しないよといていた主治医から連絡をもらい、母と妹夫婦と共に面会を許されました。面会できないはず

なのにと一瞬不思議そうな表情をしましたが、食事の会のお世話をしていた昔からのグループの積み立てを解約してみなさんに返すようにと私に伝えほっとしたようでした。付き添いは断られ苦しそうな息で眠った父に後ろ髪引かれながら帰路についた車中で心肺停止の電話を受けました。

去年の今頃、今年は「あのいつものレストランのおせちを予約したよ。」と伝えると「そうか、楽しみや。」そして、「あと何回おせちを食べられるかな。」とつぶやきました。

今年も予約しましたよ、おとうさん。母と妹夫婦と一緒ににぎやかにいただきますよ。

